

## 【地域活性化研究】

# Listen to the Voices

## — 一人ひとりの死を集めて —

愛知学泉短期大学 古橋敬一

### 要 旨

終末医療、あるいは地域包括ケアに関わる様々な人々の語りを聞き書きし、大学を起点としたまちづくりプロジェクトのリサーチ（注1）を行っている。この研究に取り組む背景にある私の問題意識は未だ明示化できておらず、それを説明するための手法としての聞き書きに挑んでいる現在地について記述した。また、そうしたリサーチから生まれた成果を活用した現在進行形のネットワーキングについても紹介した。小論では、現代のまちづくりの中に、多死社会への視座を取り入れる必要性があることに言及している。

#### 1. はじめに

大学を起点としたまちづくりプロジェクトのアクションリサーチとして「聞き書き」によるフィールドワークを行っている。小論では、そのプロセスの振り返りと考察を述べる。第1章では小論の全体像を端的に示している。第2章では本研究の背景と方法を、第3章では昨年度の成果を活用した今年度の取り組みについてまとめた。また第4章は今年のインタビュー考察、第5章は小括である。

#### 2. 本研究の背景と方法

##### (1) 漠然とした背景

本研究は、地域活性化研究をフレームワークとした中で、人々の死に関連する事柄を扱う。しかし、一般的には、地域活性化やまちづくりと人間の死は中々結びつかないのではないかと。では、なぜ本研究は敢えて、その結びつかない事柄を扱おうとするのか。そこには、一つではなく複数の理由が複合的に絡み合った意図がある。本来であれば、ここではその研究の意図や背景が示されるべきであろうが、筆者の力量不足もあり、今それを端的に述べることは難しいと考えている。むしろ、その説明を手に入れるために、リサーチを進めているが、本研究の現在地である。つまり、本研究の背景は、非常に漠然とした状態にあると言える。

##### (2) 豊かさとは何かの再考

暉峻（1989）『豊かさとは何か』が、岩波新書から出版されたのは、日本社会がバブルに沸いていた頃。そのバブル崩壊が1991年、日本は、そこから失われた30年とも呼ばれる長期低迷に突入していく。2024年3月現在、つい先日の4日には日経平均株価が史上最高値を更新したことが記憶に新しい。しかし、日本が好景気に沸いているという実感がさほどないのは筆者だけではないだろう。敢えて言えば、「豊かさとは何か」という問いは、今も私たちの社会の中で続いているのではないだろうか。

ちなみに、日本においてまちづくりという活動が各地で始まったのは、1970年頃から(注2)とされている。まちづくりの内実そのものは、活動ごとに千差万別であるが、大雑把には、地域社会の住環境等の改善に向けた具体的な取り組みとでも言えようか。まちづくりが注目されるようになった時期は高度経済成長期によって、日本が大きく改変されていった終盤の頃に重なる。ちなみに高度経済成長期は1955年から73年とされている。

社会が物質的、あるいは経済的な豊かさを享受し、それが満たされていくとき、それに対する反動、あるいは取りこぼされたり、犠牲にされた側からの声やアクションには、耳を傾けるべきメッセージがあるのではないか。今、現在もまた、時代が大きな転換期を迎えている中で、地方創生などのまちづくりも一層盛んに取り組まれているように推察される。しかし現代においては、まちづくりも少々加熱気味で、場合によっては、飽きられたり、停滞感さえ感じられなくもない。そんな時だからこそ、社会を覆っている価値観を批評的視座から見つめなおしてみることが、今まさに大切なのではないかと考える。

### (3) 現代のまちづくりの視座に足りないもの

人口減少社会に突入し、高齢化や個人化が進み、AI技術の急速な進展なども目覚ましい昨今であるが、それは見方を変えたと、多くの人が仕事を失い、孤立し孤独の中で死んでいく時代にも見える。多死社会(注3)という言葉もメディアで頻繁に取り上げられるようになった。

まちづくりや地域活性化に欠かせないのは、時代の風潮を読むことではないかと考える。それを抜きにして、いくら地域の問題に取り組んでも、深みのある課題解決は見えてこない。ましてや、人の生き死には、社会が成立するための大きな前提条件の一つでもある。多死社会においては、終活、看取り、グリーフケア、遺産、葬儀、墓など関連する様々な課題が考えられるが、本研究がフォーカスするのは、それらの課題の周辺で働く人々の価値観についてである。また、多死社会の中で、様々な形で死に触れたり、それを意識した人々の意識変容についてである。なぜなら、その辺りのことが、これからの地域社会づくりのビジョンに大きな影響を及ぼすと直観するからである。この辺りのオブザベーションについては、もう少し追加考察が必要である。

いずれにしても、現代のまちづくりには、さまざまな分野からのまなざしが注がれている。それらは、例えば、環境、建築、防災、福祉、子育て、教育、アート、地域商業、観光、多文化共生など多種に渡る。これらはどれもが重要であるが、その中に、人間がいずれ死んでいくことの前提が共有されていない、あるいは現在が多死社会を迎えていることへの視座が足りていないのではないかというのが本研究の問題意識である。まちづくりのどの分野を扱おうと、これからの時代は人の死が日常的に増加する時代に入るため、何かしらの少なくない影響が表出することは間違い無いだろう。

### (4) 研究の方法

本研究では、「聞き書き」を中心としたエスノグラフィを記述するアクションリサーチという方法を用いている。聞きなれない言葉もあるかもしれないが、順番に説明をしていこう。

「聞き書き」は、字のごとく聞いて書くことで、インタビューしたものを読み物として書き起こすことだが、これが意外と奥が深い。近年では、便利なツールも多く、筆者は録音をAIが自動書き起こししてくれる機材を使用している。当然ではあるが、人の語りは、そのままでは読み物にはならないので、ある程度の編集を入れるし、公開を前提とした本人校正も実施する。

先に、この「聞き書き」を中心としたエスノグラフィを記述するとしたのは、インタビューに至るまでの背景やそこで感じたことや考えたことなども折り込んだ文章が、これに加わるからである。エスノグラフィとは、元来、文化人類学や社会学において使用される調査手法を指すが、現代ではビジネスの分野でも使用が見られ、多義的な意味合いを帯びている。いわゆる、アンケートなどの定量調査では見えてこない側面について、参与観察やインタビューといった質的調査を用いる方法論である。

次にアクションリサーチであるが、本研究におけるアクションリサーチは、エスノグラフィを記述することと同義的である。なぜなら、エスノグラフィの記述を重ねていくことで、アクションリサーチは進行するし、その歩みもまたエスノグラフィの中に折り込まれていくからである。実は、アクションリサーチも多義的というか、様々な定義を持つ用語であるが、概ね、実践と研究が密接な関係を持ちながら、社会変革をも思考するような実践的な研究スタイルを示すものである。本研究がそれほどの射程を持てるのかは未知数であるが、今は様々な経験を持つ方々のインタビューを繰り返し、エスノグラフィを書き連ねていくことで、何らかの道が開けることを期待しつつ、探究を続けている。

### 3. 今年度の活動

#### (1) 『Listen to The Voices』の活用

令和4年度のアクションリサーチの成果として、『Listen to The Voices』という100頁弱の文庫型フリーペーパーを100部発行した。これをPRツールとして活用し、令和5年度は様々なネットワークを広げることができた。またそれをテキストとしても活用することで、学生たちの聞き書き活動を支援することもできた。

ネットワークの一つは、『震災後のエスノグラフィ―「阪神淡路大震災を記録し続ける会」』の出版イベントにゲスト出演したことが挙げられる。これは、同書の執筆者である高森順子さんにお誘いをいただいたが、そのきっかけの一つが、この『Listen to The Voices』であった。筆者は、この研究に取り組む以前から、まちづくり活動の中で、エスノグラフィを書いてきており、高森さんとは、その頃からのご縁である。研究者としては、まだ一つの単著もない私だが、そうしたイベントに招かれたことは、フィールドワーカーとして、また研究者としても大変光栄であった。そしてこのイベントで、『Listen to The Voices』についても紹介をさせていただき、配布したことがきっかけで、新たなつながりが生まれることとなった。

ネットワークの二つ目は、前述のイベントに参加してくれていた分子化学研究所の研究者である古池美彦さんに招かれて、古池さんらが主催する知的デザイン交流プロジェクトENGAWAのトークイベントにゲストとしてお招きいただいた。ENGAWAは、知的な話題を通じた専門家と市民の交流の場を設計する市民活動プロジェクトで、筆者としては、始めて接触した岡崎市の市民活動団体である。しかも研究者が運営する市民活動は、非常にユニークな試みである。今後の活動に向けて、心強い繋がりが構築できたと考えている。

ネットワークの3つ目は、かすがい市民文化財団との連携である。2023年5月31日に孤独・孤立対策推進法が成立し、内閣官房に孤独・孤立対策担当室が設置、そのモデル事業として、かすがい市民文化財団が実施した事業の伴走支援者として参加（注4）した。そのきっかけもやはり『Listen to The Voices』であった。地域の中で、孤独・孤立といった課題を抱える市民をサポートするケースワーカー等を対象とした支援事業であったが、日常生活の中で、様々な孤独を抱える人々の声を直接聞かせていただく貴重な機会となった。同財団とは、既に別事業の協働も決まっており、今後の展開が非常に楽しみである。

また、テキストとしては『Listen to The voices』を今年度に担当した17名のゼミ生のインタビュー読本として活用した。筆者のテーマは、地域社会における人間の死であるが、その成果である本書から、学生たちが学んだことは、生き方や働き方への深い探究であった。それは、このリサーチにおける「より良い人生とは何か」という核心の問いでもある。学生たちは、自分でインタビュー相手を探し、アポドリから原稿確認までの一連のプロセスをこなし、それぞれが素晴らしいインタビューを仕上げた。それらの人選は、同級生の社会人、夢を叶えたプロバスケットボーラー、ミュージシャン、ダンススクールの指導者、仕事と家庭を両立させている母など多様なものとなっている。中には、プライバシーの問題等に直面した学生やアポドリに大変な苦勞をした学生など、課題は様々であったが、いずれも貴重な学びの体験となっていたことが推察される。

## (2) 『Listen to The Voices vol.2』の発行

令和4年度は、5000～7000文字程度のインタビューを5本、4組で7名の方々にご協力をいただいたが、今年は10000～15000文字程度のインタビューを2本、2名の方に絞って掲載し、小括的に短いエッセーも掲載した。エスノグラフィも会話のみの聞き書き形式と、途中でナレーション的な文章を挟み込む形式とで書き分けてみた。現段階では、ふさわしい形式を探りながら、その都度試行しており、今回はこの形式を選択した。これも正解があるわけではないが、インタビューの話し手と受け手の双方が納得ができ、かつ記録としてわかりやすく、事実にしたものにするには配慮している。語りや会話の中では、その場で記憶がおぼつかないことや後に調べると事実と違っていることなどがある。それらについては、全て確認し訂正するのが基本であるが、時には、その記憶違いや誤りが重要である場合もあるため、それについては了解を得て訂正をしない選択をすることもある。この辺りの、詳細な点については、まさにケースバイケースと言える。

100部は、意外と少ない。出し惜しみはしたくないが、重要なネットワークツールになるため、それが誰の手に届くと、どのように活用される可能性が広がるのかについては、検討も必要である。一方で、付帯性というか想定を超える形で新たなネットワークを形成する可能性や余白も大切にしたい。その意味では、WEB等で公開することも将来的には視野に入れても良いのかも知れない。しかし、今の所は文庫型フリーペーパーという形式で、ボリュームを重ねていきたいと考えている。以下では、『Listen to The Voices vol.2』に掲載した二つのインタビューについての考察を記す。

## 4. 今年度インタビューの考察

### (1) 訪問看護師のケース

インタビューに応じてくれたのは、酒井友梨香さん。現在は岡崎市で訪問看護師として働きながら、自費の訪問看護サービスを提供する事業を立ち上げている。実は、保険適応外で自費で依頼するこのサービスに特化した事業は、開業当時は他に事例もなく、メディアにも取り上げられたという。

エピソードを概観すると、酒井さんは結婚が早く、准看護師の資格のままで、家庭と仕事を両立させながら働き続けた。そして、子育てが一区切りついた30代の終わり頃に一念発起して正看護師の資格を取得し、その挑戦の途上で訪問看護の分野に出会い、強い関心を持つ。そこで、これからの20年は訪問看護の時代が来ることを見込んで、自分の職能を活かすのであれば、病院勤務ではなく、訪問看護師として働くことを希望する。そして、訪問看護ステーショ

ンに転職すると、必要なスキルを習得しながら経験を積み、やがて、そこで生まれた問題意識を事業のアイデアに転換し、2022年に自費の訪問看護サービスを提供する事業をもう一つの仕事として立ち上げるに至る。

誰とどんな人生を歩むのか、どんな仕事を選び、どんなふうに通って生きてくのかは、誰にとっても重要なテーマと言える。しかし、それを考えるタイミングは人それぞれではないか。看護師は、一般的には目指してなる職業の一つであろう。やりがいもあれば、同時に過度に働き過ぎてしまいかねない状況にも陥りがちなのかも知れない。酒井さんは、准看護師時代に、人一倍のめり込んで働いたタイプではないかと推察する。若くして結婚し、子供にも恵まれたが、自分が目指してなった職業への誇りと責任感もあり、ワークライフバランスを保つことに相当な苦勞をされたのではないか。

しかし、その重圧を抜けてひと段落したときに、改めて自分が本当にやりたかった仕事に向き合おうと挑戦された点が秀逸である。そして、それに向き合うプロセスの中で、自分の仕事、自分の満足を超えて、より社会的ニーズを満たす方向へと昇華されて行ったところも興味深い。かの有名なマズローの自己実現論においても、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する」と仮定され、基本的な欲求が満たされて行くと、それはやがて高次へと向かい自分を超えて、他者や社会へと向かうとされている。

酒井さんによれば、現在の介護保険制度はいつ破綻するかわからない危険性を孕んでいるという。それに対し、サービスを賢く消費する方法を探るのではなく、それを自ら改善したり補完する、あるいは新たに生み出していく発想には、社会的な課題をビジネスで解決しようとする起業家精神が垣間見える。

こうした社会貢献的で創造的な生き方や働き方を体現しようとする方が、訪問看護という現場を選ぶのはなぜだろうか。やはりそこに、これからの社会の課題と同時に様々な可能性が存在しているからではないだろうか。

## (2) 元臨床検査技師のケース

インタビューに応じてくれた山内理充さんは、愛知学泉大学の家政学部管理栄養学科の教授である。藤田医科大学病院（旧藤田保健衛生大学病院）にて臨床検査技師としての13年間の現場経験を持つ。今回は、そこでの体験だけでなく、幼少期からの思い出やご自身、あるいはご家族の病気などのエピソードも聞かせていただいた。

最初のエピソードは、非常に印象的だった。それは、山内先生のご祖母様が亡くなられた際の、不思議な出来事について。その種の出来事を、私たちは現実的にどう扱っていいのかわからないものだ。しかし、だからこそ、このエピソードは、その受け入れ難い出来事に対する私たちの態度を問う上での象徴的なエピソードだったと解釈した。

考えてみれば、人間の「生老病死」は、紛れもない事実で、確実に私たちに起きる出来事でありながら、実は非常に受け入れ難く、原因のわからない、あるいはそれを考えている間もなく対応せざるを得ない出来事ばかりである。これは、仏教ではいわゆる四苦と言われ、人間の根源的な苦しみとして説かれるものである。そして同時に仏教の智慧は、この四苦と向き合う中に、人生の価値を見出そうとする。

山内先生のエピソードには、数々の死や病が登場した。いずれも因果関係の説明がつかない、あるいはそれを解明したところで、納得ができるわけではない出来事が、人間の一生には様々な沸き起こってくる。そして、それにどう向き合うのかが問われる。だが、多く場合は、問われていることさえ認識できないまま、その対処に翻弄されるのが、私たちの人生なのかもしれ

ない。しかし、だからこそ、そうした体験をした人、その状況を生き延びた人の話に耳を傾けてみる価値があるのではないだろうか。

山内先生が、周囲やとりわけ家族への感謝や愛情を説かれるのには、やはり経験に基づく深い理由があるように感じられた。また、その深い理由こそが、人生を価値的にしてくれるのではないかと考えている。

## 5. おわりに

次年度も、今年度に制作した『Listen to The Voices vol.2』をツールとし、新たなネットワークが広がっていくことを大いに期待している。2024年3月9日に開催された岡崎懇話会主催の第23回の地域活性化フォーラムにおいて、本研究の報告に対し、ある参加者からの次のような感想をいただいた。「最近、地域に一軒しかなかったコンビニが撤退し、そこにコンパクトな葬儀場がオープンした。地域のまちづくりに関わってきた身としては複雑な思いを抱いていたが、この発表を聞いて、妙な納得があった」と。本研究の試みに賛同をいただいた有難いコメントと受け止めていたが、後でよくよく考えてみると、この感想には非常に端的に、現代の地域社会、あるいはまちづくりが直面している問題の縮図が示されていたのではないかと感嘆している。

確かに、これまで増え続けていたコンビニが、近年では、減少傾向に転じている。実際に少し調べてみると、現在の販売額は回復傾向にはあるが、その店舗数はやはり微減だという。コンビニも商売である以上、利用されなければ続けることは難しくなる。ビジネスとしては当然だが、まちづくりとして淋しい。その通りである。しかし、本文で指摘したように、それが多死社会の現実である。それを受け入れて、いかに価値的な出来事を起こしていくのが、この時代のまちづくりには問われているのである。そのヒントは、多死社会に生きている一人ひとりのエピソードの中にある。これからも一つひとつ、それらのストーリーを集めていきたい。

## 注

1. 詳しくは古橋（2023）を参照。
2. 詳しくは古橋（2012）を参照。
3. 「多死社会」が新聞紙面に登場したのは1996年。詳しくは、吉川（2023）
4. 公益財団法人かすがい市民文化財団は、日本で初の自分史センターを運営している。書くことを通して、人生と向き合う市民の交流拠点となっている。

## 参考等文献（本文に引用箇所明記がない文献用）

- ・古橋敬一「一人ひとりの死をあつめて—おかざきまちづくり民俗誌の事始め—」地域活性化研究第22号、pp37-46、岡崎大学懇話会、2023
- ・暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、1989
- ・古橋敬一「地域創造の視点と実践：新たなまちづくりの展開をめざして」名古屋学院大学大学院、2012
- ・吉川直人「報道現場における「多死社会」という言葉—新聞記事の分析とインタビューより—、京都女子大学養護・福祉教育学研究第1号、2023

- ・Lewin.K : Action research and minority problems, J.Social Issues, 2, 34-46. 1946
- ・高森順子『震災後のエスノグラフィー「阪神淡路大震災を記録し続ける会」』明石書店、2023
- ・令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための地域交流拠点の整備 モデル調査事業報告書、公益社団法人全国公立文化施設協会、2024

## 謝辞

本研究は、岡崎大学懇話会令和5年度産学官共同研究の助成を受けて実施したものです。岡崎大学懇話会に厚くお礼申し上げます。また今年度の幹事校で事務局を担当いただきました愛知産業大学の教職員の皆様にも大変感謝しています。そして、インタビュー等にご協力をいただいた、酒井友梨香さん、山内理充先生のおかげでこの研究を遂行することができました。本当にありがとうございました。